

徳島子どもと教育

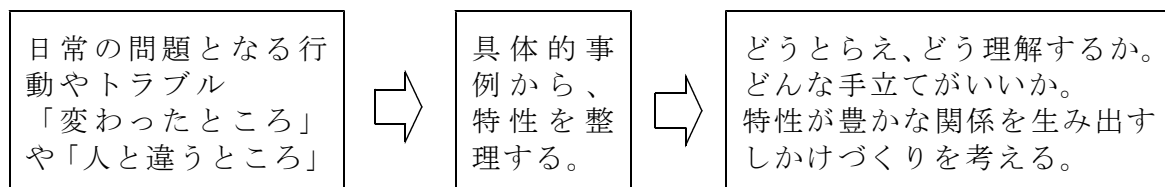
徳島県教職員の会
〒771-0017徳島市川内町鶴島115
黄金ビル 徳島労連事務所内
TEL 088-665-6644
FAX 088-665-2117
携帯 090-2891-5189
eメール dp12287892@pf.lolipop.jp
2018年2月27日 No.225

教育実践講座「学級集団づくりを学ぼう！」より

2018年のスタート（1／7）に、坂田和子氏（神奈川県小学校教諭、全国生活指導研究協議会研究全国委員）を招いて、教育実践講座を開催しました。坂田氏から、誰もが幸せに生き生きと自分らしくできる学級をどうつくり出していくのか、その実践のヒントを学ぶことができました。そのいくつかを紹介したいと思います。

☆「生きづらさ」を抱えた子どもたちとつながる☆

坂田氏の実践の構えは、「生きづらさ」を抱えた子どもたちと、「生きるに値する世界」をともに見つけようとする姿勢に、貫かれています。課題を抱えた子どもを見るとき、最も大切にしたいことは、問題となる行動や変わったところを「何でだろう」と考えることです。そして、その理由を教師が発見し、発見したら学級のみんなと共有します。また、子どもも発見します。分かったら、またみんなで共有します。この人間理解がとても大事ということです。一方教師の方は、学年の打ち合わせやケース会議で、日常の観察を整理して子どものとらえ方や手立ての共通理解をはかっていきます。



<事例1 1年生のAさんの場合>

授業中、そっと立っていつかは教室の前の入り口の引き戸を開ける、閉めるを繰り返す行動。先生は何でだろうと見守る。「どうしちゃったんだろう、この子」と、じっと観察する。ある日の図書室での読書で、電車に大変興味を持っていることが分かる。教室での扉の開け閉めは、彼にとっては電車の扉であった。訳が分かったので、クラスみんなで彼の謎の行動を共有する。すると、他にも電車大好きな子がいた。教室には電車クラブ誕生。

どちらかと言えば孤立しがちだった3人がつながった。電車があれば幸せと言わんばかりの3人。教室では、教えてもらいたい子や電車好きの子が集まり会話がはずむ。Aさんはクラスの中で多くの子どもたちとつながった。

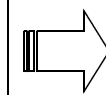
Aさんは「変な子」から「おもしろい子」に変わっていき、孤立しがちな変わった子たちが居場所を見つけ、学級の大切な存在になっていきます。



前日の全生研四国地区学習会

<事例2 3年生のBさんの場合>

- ・無意識に立ち歩く
- ・納得しないことはしたくない
- ・独り言を言い続ける
- ・片付けられない
- ・悲しみの発作



- ていねいに話を聞き取る
- 周囲の理解を進める
- クールダウンの場所を確保する
- 放課後の「語り合いの時間」を大切にする

関係する教師が集まり、Bさんのことを共通理解して実践の方向を確認していきます。

☆とにかくたくさん学びをつくる テーマは「いろんな人がある」☆

中学年の時に管理のしやすさから子どもたちを締め付け、生き生きとした中学年のエネルギーを引き出さず、きちんとした態度と見栄えだけを求め続けた結果、高学年にその反動が来る場合がよくあります。

<事例3 6年生のCさんの場合>

5年生で吹き出した学年。授業妨害が生まれ、暴力的、反抗的な子も目立ってきた。Cさんはその中心にいた。学級は排除がまかり通っている。そのあれこれを意見としてまだ言えない。だから、社会にある差別や排除や暴力を読み合う学びに積極的に取り組む。まず、朝の会では、日直が「クローズアップ・ザ・ニュース」のコーナーで、自分の取り上げたい出来事等を発表し、交流する。例「ブラジル大敗後の暴動をどう思う」「浦和レッズのサポーターがしたこと」「乙武さんの24時間テレビ批判」「被爆者に『死にそこない』と言った中学生」等々。もう一方で、「いろんな人がある」というテーマで授業（総合、道徳、学活、国語、社会など使って）を行う。

- 「オチツケオチツケこうたオチツケ」ADHDをNHKの番組で
- 「LGBT」セクシャルマイノリティーの教材を使い「あなたのコンプレックスは何？」を学び、関連して、南アフリカ共和国のキャスター・セメンヤ選手を紹介。教室には漫画（六花チヨ『IS－男でも女でもない性』）を置く
- 「ぼくたちはなぜ学校へ行くのか」マララさんより
- 「おいしいチョコレートの実実」児童労働について
- 関連して、少年兵や貧困にあえぐ子どもたちの姿を描いたオムニバス映画「それでも生きる子供たちへ」視聴
- 「少年『ゼロ』」ホームレスについてのDVDを視聴し学習
- 「ジロジロ見ないで」容貌障害の人から

等々

Cさんはいつも肩をいからせて歩いていた。だが、Cの「先生、ママにメールしといて」と言うその言葉を見逃さなかった。これは「幼児化」することを求めていると理解し、たっぷりそうさせようと判断。いろいろな学習や取り組みの中で、彼も周囲の子たちも「いろんな人のうちの一人」と気づく。差別や排除によって人権がおびやかされている人がたくさんいること、その社会の仕組み、課題と「乗り越えるために必要なことは何か」をともに学び続けた。

また、班で相談、発表することを大事にし、学習発表会では歌やダンスを取り入れた文化活動もとても大切にしている。

坂田氏が憲法と民主主義の危機という局面に立って、「いろんな人があるからこそ、学びは広まり、深まる。いろんな人の一人としていろんな人とともにどう生きていくのか、これからも子どもたちとともに学んでいきたい。」と述べていることも印象に残りました。